

かりである。掌の上で少し落ちつ
 だかフワフワした感じがあつたば
 られてスーと持ち上げられた時何
 思わなかつた。ただ彼の掌に載せ
 考もなかつたから別段恐しいとも
 ある。しかしその当時は何という
 我々を捕えて煮て食うという話で
 たそうだ。この書生というのは時々
 う人間中で一番獰悪な種族であつ
 かもあとで聞くとそれは書生とい
 始めて人間というものを見た。し
 けは記憶している。吾輩はここで
 始めて人間というものを見た。し
 かもあとで聞くとそれは書生とい
 う人間中で一番獰悪な種族であつ
 たそうだ。この書生というのは時々
 我々を捕えて煮て食うという話で

咽せぼくて実に弱つた。これが人
 時々ぷうぷうと煙を吹く。どうも
 ている。そうしてその穴の中から
 ならず顔の真中があまりに突起し
 一度も出会わした事がない。のみ
 もだいぶ逢つたがこんな片輪には
 してまるで薬缶だ。その後猫に
 て裝飾されべきはずの顔がつるつ
 今でも残っている。第一毛をもつ
 この時妙なものだと思つた感じが
 人間というものの見始であろう。
 いて書生の顔を見たのがいわゆる
 人間というものの見始であろう。
 この時妙なものだと思つた感じが
 今でも残っている。第一毛をもつ
 て裝飾されべきはずの顔がつるつ

吾輩は猫である
 夏目漱石
 「#」：入力者注 主に外字の説
 明や、傍点の位置の指定
 (数字は、底本のページと
 行数)

(例)へっつい「#」へっつい
 に傍点」
 吾輩は猫である。名前はまだ無
 い。
 どこで生れたかとうと見当がつ
 かぬ。何でも薄暗いじめじめした
 所でニヤーニヤー泣いていた事だ

すと向うに大きな池がある。吾輩は池の前に坐つてどうしたらよからうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に来てくれるかと考え付いた。ニヤー、ニヤーと試みにやつて見たが誰も来ない。そのうち池の上をさらさらと風が渡つて日が暮れかかる。腹が非常に減つて来た。泣きたくても声が出ない。仕方がない、何でもよいから食物のある所まであるこうと

決心をしてそろりそろりと池を左りに廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢して無理やりに行つて行くとようやくの事で何となく人間臭い所へ出た。ここへ這入ったら、どうにかなると思つて竹垣の崩れた穴から、とある邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もしこの竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに路傍に餓死したかも知れのである。一樹の蔭とはよく云つたものだ。こ

間の飲む煙草というものである事はようやくこの頃知つた。この書生の掌の裏でしばらくはよい心持に坐つておつたが、しばらくすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのが自分だけが動くのか分らないが無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。到底助からな

い。ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさんおつた兄弟が一足も見えぬ。肝心の母親さえ姿を隠してしまつた。その上今までの所とは違つて無暗に明るい。眼を明いていられぬくらいだ。はてな何でも容子がおかしいと、のそのそ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。